
究極生物コタツ

吉川明人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

究極生物コタツ

【NZコード】

N2147V

【作者名】

吉川明人

【あらすじ】

宇宙の光速航行ができるようになつてから、地球人はものすごい早さで宇宙に進出した。あたしはおじいちゃんがいてる、惑星SS a - 16 (Safety Signs seeing 観光型 安全レベル A - N o . 1 6) の宇宙港に着いて、滞滞に巻き込まれておじいちゃん待ってる間に散歩しどつたら、迷子になつた。そこで自分から『究極生物』やて名乗るネコそっくりの宇宙ネコ? と会うた。

「がしゃべつとるー...? (前書き)

これを書いているのは生まれも育ちも関西人です。

ネコがしゃべつとるー…?

ジュニアスクール最後の夏休み、あたし稻里誠恵は1人でおじいちゃんの住むどる惑星SSa-16 (Safety Signs eeing 観光型 安全レベルA-N0.16) にきた。人間が太陽系の外の星に暮らすようになつてから51年もたつたけど、これも光より速う移動する方法を発見したキタノダ博士のかげや。

博士の娘さんの名前から付けられた『ヒカリちゃん』理論のおかげで、今では恒星間旅行は当たり前になつて。光より速いのに、なんでヒカリちゃんやねん！ つてツッコミはもう使い古されてるねん。

せやけど環境が違う別の星に人間が暮らせるよう造りえる方法ができてからは、ものすごい早さでいろんな星に住めるようになつたんや。

一時はブームにもなつたくらいで、スターバブルとか呼ばれたんやで。

当時の宇宙港にものすごい数の人らが詰めかける古い映像は時々映像で流されるけど、ようあんだけ集まつたもんや。

そのおかげで、今のあたしらは地球から月経由して470光年離れた惑星SSa-16に、6時間のフライトで到着できるようになつたんや。えらい進歩やで。

SSa-16の宇宙港に着いたけど、おじいちゃんらが迎えにきてるはずやのに、見あたらへん。

ケータイに連絡したら、宇宙港バスが渋滞につかまつてるらしい。宇宙にどんどん進出してるのに、地上はどこに行つても渋滞してる。特にこのSSa-16は観光惑星やから時季によつてものスゴ混む

んや。

せやから少し早よつ家出とこに歸つたのに。

しゃあないから時間つぶしに歩きながら外眺めてたら、いろんな宇宙船停まつてゐる。

個人用の小型のからジャンボサイズまで、民間の宇宙船会社の船体は表面にコマーシャル流れてるから、えらい派手や。

そん中の一番はじつこに、船体ナンバーだけの愛想ないグレーの宇宙船が停まつてゐる。

ああいうのは近づかんほうがええねん。

後ろめたいオッサンらが乗つてゐるが、秘密のひとでもやつてゐオッサンらが乗つてゐんや。大体、はじつこいつがアヤシイわ。

「ちやうねん。これから流れれる『コマーシャルデータ読み込んでだけやつちゅーねん！」

とりあえず自分でツツコンビ」。

せやけどなんも動いてへん、描いてへん宇宙船で、逆に珍しいからケータイで撮つた。

みんなー、珍しい宇宙船あるでえ。

『画像アップしたら、すぐ『初めて見たー』『なんか変な感じ』『すつづ！ そんなの飛んでるの見てみてー』とか感想返つてくる。それにしても……』『、どこやうひ？

なんや貨物とか荷物ばかりで誰もおりへん。ひょっとして……。

「うわあ！ あたしまた迷てるやん……」

アカンねん。

あたしめちやめちや方向音痴やねん。

なんや知らんづちに迷つてしまつんや。

分かつてゐる。分かつてもじつとしてうられへんねん。

「おこ、おめで」

「わビックリした！ ってあれ？ 誰もおれへん。ひょっとして
怪奇現象！？」

「なにをキラロキラロしてごる？ リード」

「また聞こえる～！」

「おい！ 足元だ、下を見ろ！」

「へ？」

「下見たら、まつ白のネコがおる。

あんたか？」

「あんたが話しかけたんか？
って、そんなことあり……」

「やつと戻りいたか」

「ええええ！ なんやあ！ ネコがしゃべつヒルーーー！」

「…？」

卷之二

「なんなん?
なんかのドッキリ?
それともロボットなん?」

は喜びに分不思議の事

オレはおまえたちが惑星U-6447と呼んでいる『ファリ

アロ』といふ星から打到・監禁された」

。さういふにいふの事の體質は、

頭に心のうみをもつておれば、未知の未

SSあ
-16とは大違ひの、おちやおちや危険な屋や。

「翻訳」から「翻案」へ――翻案の歴史と現状

「宇宙人」
宇宙人「やまと。」

あれえ、せやけど確かにネトと並んで、とかがうござんとう見た

おまえがちの基準で判断するんじゃなし
不レから言れせれは

「ラッサバつて、なんなん？」

アリバの熱帯に暮す体毛かどても派手なサルた

「そつなん?
へえ!!。あたし宇都人なんや。

じゃあネコの宇宙人がなんでこんなところにおんの?」

「ふむ。どうやらおまえたち地球人すべてが理解している問題ではないようだな。

ではまず話を整理しよう。オレは地球人が地球の知的生命体であるように、ファリア口という星の知的生命体だ。

しかし、おまえたち地球人はオレたちを外見だけで珍しい生き物として、拉致・監禁、早く言えばペットにしようとする。

しかし、オレたちはそんな境遇よりも、生まれた星の環境で自然に暮らすことを望んでいる」

「なんやよう分からへんけど、宇宙に進出してから珍しい生きもんブームが起きてるからなあ。

あんたもそれで捕まつたんか、かわいそうになあ」

「おまえたち地球人は外宇宙に進出したばかりのくせに、次々他の星に暮らす生き物の生存権を奪い、侵略を続けている。

だから銀河連合へ所属させるには未発達だと多くの星系から反対されている」

「地球人ってまだ未発達なん？ ほんならその銀河連合いつっこに入つてる星つてすごいんやうなあ」

「地球も科学技術的にはクリアしている。しかし、他の星への侵略を続けるような幼稚さでは加入は認められない。

それぞれの惑星に暮らす生き物がどのような姿に見えても、対等の立場を取り、権利を認められないようでは野蛮な種族と見られても当然だ。

このままでは銀河連合はしかるべき処置を取るだろ？

「しかるべき処置つてなに？」

「地球人が侵略したすべての星から退去をせ、地球内だけでどどまるよう連合軍の監視がつけられる。

もちろん警告はするが、残念だがこの処置を受けるに至った文明は無視することが多く、抵抗するなら攻撃も辞さない。

かつて7種の知的生命体が滅んだ経歴があるが、それも銀河全体の平和のためだ」

「うわあー、そんなん大変やん！」

「まあ、今すぐというわけではないから安心しや。

だからといって、このままではそななる。やうなうなによつ考え

を改めるべきだ」

「そんなん、あたしに言われても……」

「分かつていてる。注意しているだけだ。

いづれ銀河連合の特使が地球人の代表とコントラクトを取るだらつ

「それやつたら良かつた」

「しかし、おまえ個人にできることがある」

「なんなん？」

「まず、おまえ自身が他の星の生き物を欲しがらない」とと、身近な者が欲しがつている場合にさめる」とだ

「いさめる？」

「やめやせる」とだ。その生き物にとつてなにが本当の幸せかを理解してな

「せやけど、ものす、うつ可愛がつたはる人もいはるけど」

「それはおまえたちの基準から見た可愛がりかただ。

おまえは他の惑星の者から一方的な感覚で可愛がられるなら、家族や友だちから突然離ればなれにされ、首輪をつけられ自由を奪われてもいいか？」

「それは……イヤやなあ」

「もちろんその状態に満足できる生き物もいるし、そうでなければ生きられない生き物もいるだらつ。

しかし、ガマンできないほうが自然だらつへ。」

「……そつか。そつやんなん。つん、そんなんあつたら、いめざることにするわ」

「こやめるだ！しかし、おまえは理解が早い。オレが選んだだけのことはある」

「選んだ？あたし？」

「そうだ。おまえに手伝つてもらいたい」とある

「あたしは?
なにを?」

「ネコがしゃべつとるー…？」

「今オレは地球人の体の特徴やサイズに合わせて作られた文化にいる。

いくらオレが究極生物とはいって、初めて見る機械や道具を前にしてスマーズに行動できない。

こういう場合にはその文化を作った生き物に協力を要請するのが最も効率的だ

「あたしがあると便利ゆうことやな。
せやけど、なんでなん？

あたしまだ子どもやから、そんなに自由に動きまわれへんで。しかも今は迷子の最中なんや

「そうかも知れん。しかし、おまえはオレを助けてくれた」「助けた？ なに？ あたし知らんで」

「その装置だ、それでオレが閉じ込められていた宇宙船を照らしてくれただろう」

「あ、ひょっとしたらケータイで写真撮ったのん？ あんたこの宇宙船に乗つてたん？」

さつきの愛想ない宇宙船の画像を見せたらうなずいた。
「そうだ、そこに身動きを封じられ閉じ込められていた。

オレは光が栄養源だ。

そこにおまえが活力をくれる光を浴びさせてくれたおかげでやつらの手から逃れられた

「光つて、これのこと？」

「写真撮つたら、ものすごい力がみなぎつてくるみたい。

「そうだ。その装置からオレに活力を与える光線、高い栄養源となる波長の光が発せられる」

「光が栄養なん？ よう分からへんけどケータイで撮つたら元氣に

なる言うわけやな

「大ざつぱに言えばそうだ。そしてそんな光を『』えてくれたおまえだから信用しようと考えた。

悪いが、今のところほかに信用できると思える地球人がいない」「そら、さらわれた先の星のもん信用せえ言つてもなあ

「しかしオレの目に狂いはなかつた。

おまえは短時間で状況を理解し、オレと対等に話している。信用に足る」

「あたしあんまり気にせえへんし、マンガとかでもそういうのあるからなあ。

ほんで、あたしなに手伝つたらええの？ つて、元の星に戻る手伝いしかないわなあ

「確かにそれもある。しかし、残念だがそれは叶わないだろ。」

ファリアロはオレたちが暮らす以上、地球人にとって今後も未知の星のままだ。

現状でファリアロに向かおうとする宇宙船はないし、今度いつファリアロに向かうかの情報も入手できない。

それよりも、オレ以外に様々な星から拉致されてきた生き物があの宇宙船に閉じ込められている。彼らをなんとか逃がしてやりたい「ほんならそこに捕まってる他の生きもん、檻から逃がしたらええん？」

「そんなことをすると大変なことになる。

よく考える。それぞれの星から集められた生き物たちは今、暮らしていた環境とまったく違う場所に連れてこられている。

ケージから出せば、環境の違いから最悪の場合、死に至ることもある。

かわいそだがケージに閉じ込めたまま元の星に戻してやらなくてはならない

「あ、そうか。せやけどそんなんどうやつてやんの？」

「あの宇宙船には自動操縦モードがあつた。

過去の航行データを解析し、各ケージを拉致された星「J」とで解放するプログラムを作り、無人で発進させればいい」「プログラムなんあたし作れへん

「オレの言つとおりに打ち込んでくれればいい。プログラムの作り

方は先ほど情報の収集の際、理解している」

「プログラムまで作れるん？ あんたスゴイなあ」

「ただ、オレの手でコンピュータへの打ち込みは困難だ。それを協力してくれ」

「あたしに打ち込み……ええで。

ところであつて究極生物ゆうたけど、あんたのどじが究極生物なん？」

「生き物として最高に発達しているということだ。

これまで我々よりも発達している生き物は発見されていない」

「ほんまに？」

「今おまえとオレは会話をしている。

これがどう「う」とことだと思う？」

「なんでって、そり、ネコが話すんはおかしいんやうけど、宇宙人やつたら話できてもええやん」

「そつではなく、なぜ拉致されてきたばかりの宇宙人が地球の言葉を話せると思つ？」

「ほんまや、なんでやろ？」

なんやしらんけど、頭抱えとる。

「ネコがしゃべつとる……？」

「ケージ脱出後21分間で地球人が情報を蓄積、交換する方法を探し出し、コンピュータにアクセスして情報を読み取つて覚えた。こんなことが地球人には真似できないことも理解している」

「21分で違う星の言葉覚えられるん？ うわ、それはスゴイわ。あたしいまだに火星語ニガテやのに。」

「ゆーか、あたしその間ずっと迷子でさまよつてたんやなあ」

「ようやく分かつてきたか？ さらにオレたちはどんな環境でも生き延びることができる。ゆえに究極生物と称している」

「せやけど、捕まつてしまたんやろ？」

「あれには不覚を取つた。しかし衛星軌道からの高出力電磁ビームによるピンポイント攻撃の直撃で一時的に動けなくなつた。」

その後、絶対零度のケージに捕獲され動きを封じられていたのだ」「で、電磁ビーム直撃！ アカンアカン、それはアカン。へつ？ 絶対零度つて、ようそれで生きてたなあ」

「生かさず剥製にでもするつもりだつたのだろう。しかしそれでも死ぬことはない。」

「だからこそ究極生物だ。実際に何度もおまえたちが……」

「どうかしたん？」

「地球人には固有の名前があるな？ おまえの名はなんだ？」

「あたし？ あたしは誠恵。稻里誠恵や。あんたは？」

「オレたちは自分に名前を付けず他人にも付けない。だから名前がない」

「そんなん不便なことないの？」

「ファリア口では問題ない。しかし地球の文化の中では不便だろう。おまえが付けてくれ」

「あたしが付けてもええん？」

「あたしが付けてもええん？」

「自分で考えつかない」

「そりやなあ。ほんならなんか考えるわ」

……そやな、ネコやし……ネコには小判やし、ネコはコタツで丸なるし。

「ほんなら、あんたの名前はコバンがコタツや、どっちがええ?」

「コバンかコタツ……コバンとは、はるかな昔に使用されていた通貨で宝の代名詞とも言えるものか。」

そしてコタツとは現在もなお根強い愛用者がいる暖房器具、……。

地球人の価値基準に関するものより、温まるコタツのほうがいいだろう。コタツと呼ぶがいい

「うん。ほんならあんたコタツな」

「名前を尋ねたのは、地球人全体を『おまえたち』と呼んでしまうと、誠恵も含まれるため区別したい。誠恵は誠恵と呼び、おまえたちと言づ中に入らない。」

そしてファリア口にやつけてくる者たちは密猟者、ハンターと呼ぶのが適切だ。ハンターたちは過去に何度もファリア口にきてオレたちを捕らえようとしたが、もちろん捕まるものはいない。

逆に逃げられないよう宇宙船を壊される者もいたが、もちろんハンターのように武器を使うことはない。そして、ついにハンターは衛星軌道上からの電磁ビームを発射するなどという卑劣な手段を使つた

「ほんまや、ヒドイ」とするなあ

「しかしオレで良かった。他のものが連れて行かれていれば、リーダーとして長老たちに顔向けできない

「え? コタツがリーダーやつたん?」

「まあな。しかしオレが連れ去られた時点で次のリーダーが決まる。そういう仕組みだ」

「そんなん、捕まえられた上にリーダーまでやめられたるんて、か

わいそうや

「同情の必要はない。いなくなつたリーダーとは追放や転落ではない。

選ばれるものは限られているが、数人による持ち回りであり、場合によつては、気候の変化によつて1日に数回交替する場合もある。つまりおかれた状況に最もうまく対応することができるものがリーダーとなる習性だ。個体自体が強く、種族そのものも柔軟性が高いため、生き残る可能性が高い

「そんなに強かつたら、人間みたいに増え過ぎたりせえへんの?」「ファリア口の女性は生涯を通じて生める子どもの数が決まつている。

最多で3人。通常は親と同じ数の2人だ。時に1人の場合もあるが、時に3人の場合もある。それで人口はほぼ一定している

「うまいことできるんやな」

「オレたちはそのまま自然環境の中に生かされている。地球人もその自覚を持つべきだな」

「よう分からへんけど、たぶんええこと言つてるんやううなあ

「……まあいい。ではさつそくだがオレと一緒にきてくれ

「行き先分かつてんの?」

「この施設内はすべて把握している」

よかつた! ほんならコタツおつたら迷わんでええやん

「つて、コタツ待つて〜!」

「早くこ〜!」

あたしはあわててコタツのあと追いかけた。

えりこじゅりゅー……？

連れてこられたんは、あの愛想ない宇宙船があつた搭乗口横の小さい部屋やつた。

「ここのプログラムを作り、送りこむ」

そんなんいうて、なんも警戒せんと入つていくけど、誰かおらへんの？ 大丈夫なん？

「警戒しているのか？ 大丈夫だ」

「なんで分かんの？ 「タツつて心まで読めるん？」

「それだけオドオドしていれば分かる。

オレの嗅覚と聴覚はおまえたちよりはるかに優れている。誰かいるかは見なくとも分かる

「そりなんやあ」

「ではプログラムを作る。

誠恵、オレの言つとおり打ち込んでくれ

「まかせといで」

「タツの言つとおり、行く星とここの解放する生きもん閉じ込められた檻の順番プログラムしていく。

コンピュータはジュニアスクールから必須の科目やから、打ち込むだけなんはそんな難しいことやあらへん。

「……次に惑星 P R a b - 2 2 (P l a c e o f R e s i d e n c e 居住型 安全レベル A B - N o . 2 2) のロード47へ立ち寄つてくれ」

「ロードから連れてこられた生きもんもいるん？」

「いや、そこは宇宙動物愛護団体『S A P』が所有するロードだ。宇宙船の燃料を補給しなければならない

「そつか、ずっと飛ぶわけいかへんからなあ。せやけど補給してくれるんやろか？」

「連絡を取つて頼んでみるが、これまでの活動から考えて信用できると見ていいる」

「コタツはなんでも知ってるんやなあ」

「情報収集の際、集中して探しておいた」

うしてプログラムみんな打ち込めた。

「よし、実行モードだ。それでプログラムが起動する

「ほんばの実行や!!

アーティスト曲集 第二集

なんですか？

「オレが横から見ていた。プロゴラムは聞こえてしない。

ただ別の場所から発進が止められて、一歩も出づ

「アーニングの場所は、お嬢様の本が並んでる部屋だよ。」

りなれば助せぬ

「かばに重はない」

おそれから、どうぞお聞かせください。

仕方ない
オレが直接一シンビニーだと一なかり
誤作動させて無

理やけん発進させる」

－そんなん事故になつたら大変や!!

アカンアカン！！
アカンでえ」

「事故は起こさない。そしてあの宇宙船の持ち主は責任を追及され、

刑事問題にまで発展する可能性がある

うまくいけばハンターの存在が明るみに出て世論に一石を投じる

「……なんやよ! 分からへんせど、密猟のオッサンらが困るわせやな。

せやけどほんまに事故せえへん?

「拉致された見知らぬ種族であろうと生命は尊重する。当然だらう。」

一時的な混乱は起らぬだつたが、二二〇年を過ぐる。

「直接つながるって、どうすんの？」

「見ていろ」

「コタツはコンピュータの裏に手え突つ込んでなんかやつてる。
「……着陸待ちが14機に発進待ちが9機か……よし、発進しろ！」

しばらく待つてたコタツが自分で実行キー押したとたん、宇宙船が一気に空に昇つていつた……よう分からへんけど、成功やな。せやけどえらい数のサイレンの音聞こえてきた。えらい騒ぎになつてしまふみたいや。

「そこにいるのは誰だ！ なにをした！－！」

ドア開いて顔だしたのは人相の悪いオッサンやつた。

えりこじゅわひやー……？

これは絶対悪モノやな。

「逃げるぞー！」

オッサンの顔めがけてコタツが飛びついたら、あわてもがいとる。

ホンマにマンガみたいやつで、ゆうてられへん。はよ逃げよ。もがいとるオッサンの横すり抜けて、通路に飛び出したけど……あれ？ どつちに行つたらええんやろ。

「ともかく逃げる！ あとからオレが探す」

ほんなら安心やー。とにかく走つたらええねん。こりこりので捕まつたら大変なんや。

……つて言つとつたら迷つしもた。

せやけど今回も安心や。コタツが見つけてくれるはずや。こりから探したらええんやろか？

それともへタに動かんと、どつかに隠れとつたほうがええんやろか？

あ、なんやちよつじええとこに隠れられそつな隙間あるやん。あそこにしよ。

「タツ、早よきてやー。

個別管制室に2人の男がいた。

1人は先ほどの男で、もう1人は銀髪の男。

「もう一度確認したい。お前を襲つた白い動物以外に1人いたのだ

な？」

「え、ええ。早く逃げると……その、動物が」「人間の言葉を話したと？ 気は確かなのかね？」あきれながらも銀髪の男は部屋の隅に子ども用のカバンを見つけた。

「「」へ子どもを入れたことは？」

「子どもどころか、ここは一般人も入室禁止です」

「分かっている。調べる」

カバンから中身が乱暴に引きずり出されると、名前の書かれた子どもの中品が出てくる。

「稻里誠恵か……今日の乗客名簿を調べる。すぐに連絡先が分かる」

指示された男はあたふたと駆け出して行く。

残った銀髪の男は、いまいましげに口をゆがめる。

「……どういいつもりか知らんが、ガキのイタズラにしては、やりすぎたな」

……ホンマに「タツあたし見つけてくれるんやろか。もう一時間以上たつてるやん。

はあ～おなか空いたな……カバンあつたらお菓子入つてたのに、さつきの部屋に忘れてきたからなんもあらへんし。

「遅れてもまない」

「うわ！ びっくりした。いきなりやな。

足音くらいたててえな」

「オレはたてないのが普通だ。それより宇宙船は順調に航路に乗つた。

SAPも全面的に協力を約束してくれて、各惑星にちゃんと戻れるかどうか監視船も出してくれるそうだ。

安心していい。次はオレたちの問題を解決しなければならない

「問題つて？」

「宇宙船を出発させるまでは、発進後速やかに宇宙港を逃げ出せば問題なかつた。

しかしあの管制室で誠恵のカバンが見つかり身元がばれた。今やつらは誠恵を捜しまわつてゐる。

やつらが責任を逃れるには、この騒ぎの張本人を誠恵に押し付けて犯人にするのが望ましい。このままではマズイ

「なんやてえ～～！ そんなんアカンやん！～」

えらこひつちや～！

「だから逆に相手を捕まえればいい。考えてみる、宇宙港には必ず検疫がある。

密輸入されるにはそこをすり抜けなければならない。

あの宇宙船に捕えられた生き物は34種77体以上にもおよんでいた。

それほどの数をす通りさせるには内通者がいるに違いない。証拠を押さえて警察に突き出せば誠恵は犯人ではなくなる

「そんなん、どうやつたらええの？」

「幸いやつらはまだ相手を子ども1人と動物1匹」と考えている。オレはすでにあやしい相手のいる場所は目星を付けてある。やつらが誠恵を捕まえる前に、こちらから先に討つて出る

「アカン、そんなんムリやわ」

子どものあたしになにができるゆうねん。

ムリムリ、絶対ムリやわ。

うちとかにも連絡いつてえらいことなるんやうな。もうガッコも行けへんようになるかもしねへん……。

「……ほら、誠恵」

「なに？ あ……」

どつから持つててくれたんか、梅干しのおにぎり差し出してくれた。

「誠恵の出身地一ホンでは、ござとこつ時にこれが一番力が湧くとあつた」

梅干しはちよつと茹干やつたけど、おなか空いてるし、せつかく持つてきてくれたんや。

「あ……おいしいわ。梅干しのおじきつつて、こんなおじしかったんや」

「安心しろ誠恵。誠恵にはオレがつっこむ。ファリアクロの究極生物「タツ」がな」

「そやな。そや、「タツ」も」

ケータイで撮つたら、もっとたくましなる。
おにぎりと「タツ」の笑顔(?)でなんとなぐ、なんとかなりそつ

な気になつてきた。

黒幕が出ておなつた！……？

「コタツといつしょに来たんは、宇宙港の中でも立ち入り禁止中の立ち入り禁止の場所……ブロック5に区分けされてるところや。もちろん監視カメラあるし、警備員いてるし、身分カードとか暗証番号必要なことがあつた。

しかもあたしは密猟のオッサンらから追つかれられてるんやけど、来れたんは、倉庫出発する時、コタツがおもろいことしたからや……。

「こ」のままで行けば、どんなに隠れようと監視カメラすぐに見つかり捕まるだろ？

「どないしたらええの？」

「オレが誠恵の姿を見えなくする」

「そんなんできるん？ スゴイなあ」

「しばらくのあいだは毛布にくるまれてていると考え、体の力を抜き楽にしておいてくれ」

言いながら背中向けたコタツの体がブワッ… て広がって、あたしの体包んだ。

一瞬まつ暗になつたけど、ちょっととして目のとこだけ外の様子見えるようになつた。

首動かして足元見ても……なんもあらへん。せやけど、ほんまフワフワのんに包まれてる感じや。

「どないなつてんのこれ？」

「オレの体を薄く伸ばし、外側を光らせている

「光らせてる？」

「人間の目に見えない範囲の光で一時的な目くらましをしてると考えてくれ。

赤外線探知機のこと考えれば紫外線で光りたいところだが、誠恵に有害なため赤外線で光っている。

「いや」という時はできるだけ影響のないように紫外線に切り替える「ゆう」とは、コタツがほんもんのコタツになつてスゴイ温つなつてるいうことやねんな」

「そうかもしけないが、潜入する少しあいだ、体の力を抜いてリラックスしておいてくれ。不自然な動きは発見されやすい」

「あ、そんなんや「ermen」
「行くぞ」

自分で動かしてへんのに手足が動く変な感じや。
せやけど、ほんまに見えてへんねんな……誰とすれ違つても見られへん。

堂々と警備員の前通つても平氣や。

身分カード必要やつたり暗証番号必要なんは、なんでか分からへんけどドア開くし、番号合づ。

「究極生物つてなんでもアリやな」

「田星を付けた段階で目的地のルート上にあるドアの身分カードを偽造し、暗証番号を引き出した。他のルートではこうはいかない」「アヤシイ場所つてどこなん?」

「施設内で最も厳重に警戒されているブロック5と呼ばれる区画。政府関係、特に軍関係の資材を保管してある場所だ。

ここへの搬入搬出は他とは完全に切り離してある。ただし、検疫港もすぐ隣にある」

「むつちやアヤシイやん」

「外宇宙からの未知のウイルスの検出など、検疫の結果によつては軍を動かさなければならない事態もある。宇宙時代には検疫港・軍関係・緊急医療設備は協力態勢をとるのが普通だ。

ただし、今回のような悪影響が出る場合もある。

オレはこの態勢をあやしいとにらんだのではなく、それぞれのト

ツプの経験を確認し、一つにじまほり荷物の流れを調べた。確信はある

る

「そんなん出発する前に教えてくれたらよかつたのに。なんかもう安心してきたわ」

「だから話さなかつた。事態が切迫していることに変りはない。わずかな油断が根底を揺るがすことがある。実際に相手と会つたものの違つていた場合、」ちらの手の内を知られた上で最初からやりなおしとなる

「脅かさんといてえな」

「脅しではなく事実だ」

「そやから「ワイ」と言つんやめて～～～」

……そんなん言いながら、結局誰にも見つからんと密猟のオッサンのこるところに着いた。

黒幕が出てきよつた！……？

かかつとつたドアのカギは、「タツ」があつさり開けた。中には髪の毛まつ白のオッサンがあつて、ドア開いたんびつくりしとる。

「誠恵、降ろすので足元に気をつける」

あたしくるんじる「タツ」が元どおりの姿に戻つたら、オッサン余計にびつくりしとる。

「な、いつたいどうやつてここへ来たのだ」

「えーつと、なんやつたつけ？ 光で見えんよつにとかやつたつけ」

「答える必要はない。しかし、その反応から確信した。

お前が検疫を素通りさせている張本人であり、誠恵を落とし入れようとしている黒幕だな？」

「なんのことか分からんな。私はケダモノと会話するつもりはないぞ」

「「タツはケダモノやないで！ フアリアロの究極生物なんや」

「そのケダモノで大金を得ておまえは、ケダモノ以下というわけだ」

「ケダモノが人間に意見するな。地球人こそ宇宙で最高の生物なのだ。

その我々が未開の惑星に棲む珍しい生物をどうしようと勝手だ。むしろ我々の手で保護してやらなければならないのだ。

そして中には珍奇な生物を欲しがる富裕層がいる。その者たちに変わつて生物を手に入れてやつてているのだ。多少高い値を付けるのが当然だ」

「オッサンなに勝手なこと言つてんねん。

オッサンがどつかの星の生きもんにさらわれて飼われてもええんか？」

「ふん、あり得ん。あり得ないだろつ。地球人はこれから銀河系を、

宇宙を支配していくのだからな」

「なに言つてんねん。コタツ言つとつたで、地球なん、まだ未開の星やから銀河連合いうとこに入いらしてもらわへんねんで」

「なにを言い出すかと思えば、ガキのたわごとか。銀河連合？

今どきそんなバカげた話を信じるやつがいるか。

おつと、お前がそうか。バカなガキめ！」

「なんやてえ！」

「待て、気にするな誠恵。

このタイプは分かりやすい。多くの未開の星で見られるエイボンヌ的な性格のものだ」

「へ？ エイボンヌ？」

「適切な言葉が見つからない。表向きには良識があるよつて見せ、裏ではこのような行動が平氣でできるものを意味する」

「ギゼンシャて言つんぢやうん？」

「偽善者なら表向きに良いことをする。

しかしこのタイプは特になにもしない。ただ良識があるよつて見せるだけだ」

「ようは悪モソいうことや」

「ふん……ともかくお前が稻里誠恵といつことだな。わざわざ自分からこゝへ来るとは、探す手間が省けた。部下じもにはすぐ戻つてくるよつ命令しよう」

「残念だがそれはできない。たつた今、こゝのブロックはオレが封鎖した」

「なんだと

「こゝの部屋に到着したと同時にすべてのドアの暗証番号が変わるように細工しておいた。

初めから解読したとしてもかなりの時間がかかる。おまえを警察に突き出すには充分な時間だ。ただその前に確認しておきたい。

おまえはなぜ自然界の法則に逆らつてまで自分たちの内でしか通用しない金という価値観に捕らわれる？

大局を見すえればそれがいかに無意味なことか理解できるはずだ
「我々の内であってもそれが通用するのなら問題ない。この世はど
れだけ金を待つて いるかで社会的地位が決まるのだ。

例えどれほどのクズであっても、金さえ持つていれば尊敬される
「それやつたらお金持つてへんもんは、あかんみたいやん。あたし
のおじいちゃんいつもお金より心が大切や言つてるで」

「金を持つていないやつに限つてそんなことを言つんだ。自分が持
たない負け惜しみでな」

「おじいちゃん負け惜しみやないで。そら、大金持ちやないけど広
いうちすんてるし」

「中途半端なやつが一番たちが悪いんだ」

「止めておけ誠恵。このタイプになにを言つてもムダだ。自己防衛
の理屈を並べることにかけて才能を持つて いることが多い」

「言い訳だけは上手い言つておじやな。あたし言い訳した時、おじ
いちゃん言つてたわ。

そんなん言つてたらろくな大人ならへんつて。ほんま、言つてた
とおりやな」

「やかましい！」

黒幕が出てきよつた！！…？

「それよりも、それほど自分の価値観に大見栄を切れるのであれば、決して自分が正しい」とをしていると考へているわけではないようだな」

「もちろん正しいことをしているとは思つていないが、間違つているとは思つていないぞ」

「言つてゐる意味分からへんわ。正しないんやつたら間違つてゐんやん」

「子どもには理解できないだらつ。需要があれば必ず供給が成り立つのだ。

そしてそれを完全に止めさせようとすればするほどますます需要の熱が高くなる。ましてや自分以外の者が誰も持つていらない稀少動物ともなれば、価格は天井知らずだ。

それは人類の欲求、夢を満たしてやつてゐることと同じ。

「いやつて私のように検疫の目をかいぐらせる者がいるからこそ、それが可能となる。いわば私は夢を売つてゐるのだよ」

「だからおまえたちは幼稚だ。自分たちのためだけの、目先の利益に目が奪われやつていいことと悪いことの判断ができない。

オレに言わせれば誠恵のほうがよほど大人だ。姿形がどうあるとも、オレに対してちゃんと礼儀をもつて接したぞ」

「ふん、たかがしりで捕えられたネコモドキが偉そうなことを言うな。さつさと檻に戻るがいい」

そんなこと言いながら、オッサンが机にあるスイッチ押したら天井から可動式のアームが伸びてくる。

「うわあ！ お約束のやつちやな。そんなネタ使い古されたるで」

「ネ、ネタではない！」

「安心しろ。こんなものでは捕まらない」

近づいてきたアームをコタツが軽う爪で引っかいたら簡単に折れ
て壊れた。

「バ、バカな……大気圏往復用の宇宙船の船体に使われるKP3合金だぞ」

「ホラ、なんやよ「分からへん硬そうな金属が折られる」と自体お約束なんや。そんなんあたし五一シーホンのもんにはウケへんで」

「やがまし！」「ケ狙いしやなし！」
「……」

「なんや、秘密にしどつた強力なロボットでも出てくるんか?」

תְּלִימָדָה וְעַמְּדָה

「オッサンひねりないなあ」

「國學研究」編輯部

開が決まつてんねん」

「文化のひとつというわけか」

文化でいいか

卷之二

גָּמָן וְעַמְּדָה

「誠実、気をつける。かなりの量のエネルギーが一点に集中している。それなりの破壊力を持っているだろう」

「そ、うなん?
あのオッサンから考、えられへ

「……いやしかし、このエネルギー処理パターンは覚えがある。星軌道からオレを撃つた電磁ビームと同じものなんだ。」

「装備したことはないか？」

「んん？　U U e - 6 4 4 7 かどうかは知らないが、ハンターの注文で横流ししたことはあるぞ。

ふふん、といつことは君がその獲物かね。これから現れるロボットは電磁ゲーム」ときで捕まるようなマヌケには到底たちうりできないぞ」

「コタツがマヌケやて？！」

「いいから下がつていろ誠恵」

コタツが言ったとたんに左の壁が上がり、中からせや付かれて
ナツ立てたようなんが出てきた。

せやけど……放射状についてる8本足が気持ちわるい。

黒幕が出てきよつた！！！？

「なんか見た目マヌケやな。究極言つんやつたら口タツみたいに可愛いかつたりカツコよかつたりせんとあかんわ」

「アツツパツタ型だな」

「あれつてアツツパツタ型つて言つん？」

「いや、地球で例えるならバクテリオファージに近い。

ロボットではなく細菌に感染して増殖するウイルスだが

「なんや分からへんけど、気持ちわるいもんやな？」

「形状から見て全方位へのレーザー発射が可能な移動砲撃ロボットだろう。オレから見れば旧ロボット開発時代の遺物だ」

「うるさい！ ええい、アラキヂ6号。侵入者を捕らえろ。殺してもかまわん！」

オッサンに言われたとたん、ピーナツはこいつにシャカシャカ近づいてくる。

イヤやあ、意外に早い。

「机の下にでも隠れていろ！」

言われたとおり机の下にもぐり込んだけど、「口タツ心配や……」口タツも吼えるし、ものすゞい音してて、こわあて出られへん。
……せやけどちよつとだけ。

そうつと顔出したとたん、上からピーナツがガツシャンつて降つてきて、あたしとまともに顔（？）が合つた。

「誠恵！――」

上から降つてきた「口タツ」の爪が、ピーナツの頭切り裂いたと同時に、ピーナツのレーザーがあたしのほっぺたかすめた。

髪の毛ちょっと切れたけど、口タツが角度変えてくれへんかったら……顔面直撃しどつたところや。

「……あ、熱つつい。アカン、今までメガネどつかいつてもつた」「これか？」

「コタツがどつかから、くわえて持つてきてくれたんは……。

「あつ、それや。ありがとう！　あ、あうう」

せつかく探しててくれたメガネは、片方のつるが切れて、レンズも割れてた。

使えへんことないけどあんまり使いもんにならへん。

「どうしよう。いつもやつたら予備持つてるんやけどカバンどつかいつてしまたからあらへん。

メガネ無いとあたし、20センチ先もハツキリ見えへんねん

「ちょっと貸してみる」

「コタツにメガネ渡したら、なんやジーッと見てフイッとあたし見る。

「近いものは作れる

「へ？　どうやつて？」

「見ていろ、と言つても見えんか」

ハツキリ見えへんけど、コタツの爪がニユーッと伸びてメガネの形になつていく。

「かけてみる」

「うわ！　ハツキリ見えるわ。これまでのんより見えるくらいやー！」
「材質と形状を調べ、オレの爪の角質層を利用した。ちょっとやつとで壊れる心配はない」

「うん。ありがとう！　せやけど……」

血いは出てへんけど、ほつぺた焼けるみたいに痛い……つて、焼けたんやつて。

こんな時でも自分でツツんでるのイヤや思てたら、コタツがひざに乗つてキズなめてくれる……。

「安心しろ誠恵。オレたちのだ液には強い殺菌効果と治癒効果が認められている。

この程度のキズなら跡も残らず消える

感動的やつたんが一気に覚めてもうたわ……せやけど、痛みなくなつた。

あれ？ そつとくえぱピーナツは……いつの間にかグシャグシャに潰れとつた。

「うわ！ ハタツ、その田なに？」

ずっとまん丸うで可愛らしかった黒田が、ネコと違つてななめヨハに怒つたみたいに吊り上がって細うなつてて、ハ、ハワイ。

「……作つたばかりだが、少しのあいだ、すまない」

田のことはなんも言わんと、スゴう静かに言いながら、ハタツはあたしのメガネ外した……あ、もうなんも見えへん。

見えへんけど……たつた今、ハタツがおつたところから『ナニカ』が、ものスゴ吼えながら飛んでいった。

……体中からなんやいつぱいへんなもん出てて、体も何倍も大きいい……そやから、アレはハタツやないねん。

「うあ！ きひやあああああえあああああああ！」

ハワイとかくらいやつたら絶対出せへん絶望的なオッサンの悲鳴と、機械の壊れる音……あたしも頭抱えて床に伏せるしかあらへんからなにが起こつてんのかそつぱり分からへん。

……て、急に静かになつた。

……終わつたんかな？

黒幕が出てきた！？

「誠恵、メガネを返す」

左から「タツ」の声が聞こえて、そおっと見たら、ボーッとさつきと変わらへんサイズの「タツ」と、たぶん、差し出してくれてるくんはメガネ。

「うわ！ うわあ！！ なんやコレ」

部屋の中メチャクチャで、壁ごと剥がれ落ちてる。

オッサンは部屋のまん中で大の字になつて失神しとる。

「なにやつたん？」

「ああ。これまでの自分の行いを思い出しだけだろ？」「

「なんや、そらしゃ あないなあ」

もう「タツ」の黒目はまん丸に戻つとつた。

密猟と検疫と武器横流ししてた証拠「タツ」がかき集めて宇宙港の交番に連れて行つたら、警察の人らと軍の人らでちょっととした騒ぎになつた。

ドラマとかで利益をむさぼつとつた悪役がやつつけられた時に、もつと偉いさんに全部ばれて地位失うつてのん、ほんまに見られるとは思わへんかったわ。

最後までお約束守つてくれるオッサンや。

カバンも無事に返つてきて、あたしと「タツ」がホツとして出ようとした時……施設全体がズシンーって揺れた。

「なんや今の？」

「爆発音だ。位置は宇宙港の地下だな」

「爆発？ 事故でも起きたんやろか？」

「最悪の考えだが、オレがあの部屋を破壊したことが原因かも知れ

ない。なんらかの証拠隠滅のためにな。もしさうだった場合、破壊はこの施設全体に及ぶはずだ」

「コタツがそう言つてる間に、もう一回ズシン！ てきた。

「間違いないようだ」

「そんな冷静に言わんといて。せやけど今宇宙港にどんだけ人あるんやろ。あたし降りてきた時もけつこうつたで」

「放送室へ向かおう。パニックになつても構わない、全員を避難させる」

「そんなん、あたし放送室がどこにあるかなんて知らんで」

「港内はオレがすべて把握している。ついてこい誠恵！」

「あ！ 待つて待つて！」

放送室つて書いてあるドア飛び込んだコタツに、中にいた人ら「あれ？」 つて顔で見た。

「責任者は誰だ！」

「コタツが立ち上がりつて叫んだとたん、みんなポカンとして顔見合わせる。

そらそらやる。

「「」のいちばん偉い人だれやあ！」

あたしが叫んだら、いちばん奥でポカンとしどたおっちゃんがこつちに顔向けたとたん、ポーンとコタツがそのおっちゃんの机の上に飛び乗る。

「今の震動は感じたな！？」

「……え？」

「震動を感じたかと聞いている！」

「……あ、ああ

「地下で爆発が起きた。そこは宇宙船の燃料庫に近く、誘爆すればこの施設全体が崩壊しかねない危険性がある。今すぐ全館内に退避放送を流してくれ

「いや、あの……状況が、理解……できないのだが

「オレは宇宙港の、人間の入り込むことのできない個所の検査・点検・警戒を目的として造られたネコ型のロボットだ！」

そのためこうして人間の言葉を話し、2本足で立つて歩ける……！
それ以外考えられないだろ？

そのオレが地下の爆発を緊急事態と判断して、この施設にいる者たちを即刻退避させようとしているんだ！

オレは今、危険度を示す最高レベルEで動いている。早く全館内に呼びかけるんだ！」

「そ、そう言われても、そこまでの判断を私だけでは……」

「誠恵！ お前の身分カードを渡してくれ！」

あたしの身分カードってなんやあ～～～？

「左のポケットに入っている！」

左のポケット？ なんや、なんか入つとる……あー そうか、コタツの作つた偽造身分カードやな。
そういうノリか！

「これや！ 読み取つて確認してみい」

「「」、子どもが？」

「子どもやいうて、なめとつたらアカンで。普段は人前には出えへんけどブロック5まで入れる資格持つてんねんで。ホラ」

読み取られたカードには、微妙にあたしに似てる[写真と違う名前]が出てるけど、そのほうがええねん。

「うわ！ 本物だ！！ 失礼しました！！！」

「あたしが全責任取つたる、全館放送流しいー。今すぐにやー。」
「す、すぐに流します！」

早速おつちやんと、部屋におりたみんなで流し始めてくれた。

管制塔の人らはギリギリまで逃げんと着陸しよとしてる宇宙船も全部他の宇宙港へ誘導して、宇宙船にもトラブルなくして、宇宙港近くにおつた宇宙船もあわてて離れた場所に移動して事なきを得た。

一時はパニック起きて、ケガ人も何人か出でしもたけど、放送のおかげでみんな逃げられて、宇宙港全体の爆発やつたのに、死んだ人は1人もおらへんかった。

……せやけど……せやけど、コタツが。

……死んでしもた。

死なへん言つたやん！……？

「あたしらも逃げな！」

放送室から出て「タツに言つたけど、『タツは動かへん。どないしたん？ 早よ逃げな』

「オレはまだ行けない。誠恵は先に逃げろ」

「なんでなん？ 一緒に逃げよ」

「人間は逃げだせる。しかし、乗客の手荷物として運び込まれている生き物たちは逃げられない。オレは彼らを開放していく」

「そりなん？ それやつたらあたしも行く」

「ダメだ！ オレはこの建物全体が崩壊しそうとも生き残れるが、誠恵は生きられない。根本的な丈夫さが違う」

「せやけど、コタツ置いて逃げられへん！」

「……しうがない。地球人は言い出したら聞かない」とは承知している。ここで時間をムダにしたくない。

しかしこれだけは約束しろ。オレが限界だと判断し、もつと逃げると言つた時には逃げてくれ。反対にオレは必ず生き延びると約束しよう

「ホンマに？ 絶対に生き延びてくれる？」

「絶対だ。オレはなにがあつても死なない」

「分かつた。そん時きたら合図して」

「もちろんだ」

「タツのあとついて手荷物置き場に着いたら、ようけえ生きもんいてる。

危険なん分かつてゐんやうひ、みんなものスゴイ吠えたり暴れたりしてゐる。

「こんなんで逃がしたら危ないんやうひの？」

「

！

「うわ、ビックリした！」

「コタツなに叫んでんの？」

「せやけど、そのとたん吠えたり暴れたりしつた生きもんコタツと静かになつた。」

「すべての生き物の共通語でこれから助けることを教えた。カギさえ開けてやれば自ら避難する。誠恵、誘導してやつてくれ」言いながらコタツは次々カギ壊していく。ドア開いたらどうぞ逃げ出して……わあー、イッち、イッちぐるー。」

「あつちやー、出口はあつちやー。」

あわてて言ひたら分かったみたいで、みんなあたしの囁ひ出口のほうに走つていく。

あとから出られた子らもそのあとについて逃げてくれる。

せやけどスゴイなあ、すべての生きもんに共通の言葉なんあるんや……あたしじんせん分からへんかった。

「あれ？ ほんならあたし生きもんちやうん？」

「悩むな誠恵。お前たちは特化した言語を持つていて理解できなくなつていて」

「そりなん？ 勉強したら分かるようになるかなあ……アカン、あたしコトバ苦手やつたんや」

最後の一匹が逃げて、残るはあたしとコタツだけや。

「よしー 行くぞ誠恵」

「うんー。」

あたしらも逃げよとした時、「ンンシー、つむわわわのズン」とゼン違う衝撃が足下にきた。

「しまつた！ 誠恵！ー。」

コタツが飛びついてきた時、足もと光つた。

アカン！ 真下からの爆発や！
なんも見えへん！

……コタツ、大丈夫やろか……。

死なへん言つたやん！……？

田え覚めたらまつ暗なとこ倒れとつた。

死んでもたら、いんなんもありへんといへんやなあ……手で手え触つてもかやんと感じしるし、顔触つても顔の感触するナビ……やつぱり死んでしもたんやうなあ……。

あのあとビうなつたんやう？
おじいちゃん迎えに来てくれたのに。

地球上のお父さんとお母さん悲しむやうなあ……親友のつっちゃんとか順ちゃんにも、もつ金えへんねんやうなあ。

死んでしもたのに、泣けるんやなあ。

「泣くな誠恵。誠恵は死んでいない」
まつ暗な中からコタツの声した。

「コタツ？ どこなん？ コタツ無事やつたんか？」

「……無事だ。しかし、もう少し待て。今はおとなしくして、おこしてくれ」

「うん、分かつた」

コタツの言葉で安心して、なんや氣に抜けてもうた。コタツ無事やつたんや、ほんであたしも大丈夫やつたんや……。

「」の辺りまでくれば……大丈夫だらう

まつ暗な中にコタツの声したとたん、バカッと周りの壁が開いた。
うわ、まぶしー、田えくらむ。

「ヒーヒー」やあ？

「あー！」

壁やない！ ロタツの体が伸びてあたし守ってくれとったんや！

「ロ、ロタツー、ああーー、なんやあんたそのケガはーーー！」

宇宙港から離れたところにある野生の空き地で、あたし出してくれたとたん倒れたロタツは、白かった毛皮あちこち焼け焦げて黒うなつてるし、全身キズだらけ……。

体ボロボロやのに、こんなところまで連れてきてくれたんか。

倒れたロタツから血が広がっていく……宇宙港のほう見たら、完全に壊れてて黒煙上がってるところからあいつかと血の跡続いてるやん！

「あんたそのケガであたしヒーまで運んできたんか？ そんなんムチャや！」

抱き上げたかったけど、ヒーのケガや。へたに動かしたらあかん。

「……これでも、最低限の……距離だ。二次爆発の、危険も……あつた」

息絶え絶えに苦しそうやのこ、あたしなんにもでけへん……。

「そんなん……そりやーー、お医者さん見せなーー！」

「……ム、ムリだ。地球の生き物とは体の、構造が違う。

それに……そんなことをすれば、オレは解剖され、標本として、わらわれる……それは望まない

「せやけど……せやけど……そや！ ケータイで撮つたら元氣なるんやつたな！」

あわててケータイで撮ると、ピクッと動いてくれた。

「……樂になる。しかし、この体は……もうダメだ」

「そんなんイヤやー！」

「大丈夫だ、安心しろ。究極生物であるオレは……死ない」

ケータイ撮り続けても、ロタツの言葉がだんだん弱あなつてくる。

「……『タツ、 1Jへしたら元氣になる』ってたやん… 死なへん言
うたやん！」

「……悪、かつたな……いろいろと、巻き込んで……
少しだけ顔上げて、あたし見ながら言つた。」

「そんなんかまへ……！」

『タツの頭がガクツと落ちて、全身から力が抜けしていく……。

「『タツ死なんといで！ 死んだりイヤや！ お願いやから死なん
といで！ 『タツ！』

『タツ抱き上げて、鼻先に頬を近づけても……もひ息してへん。

「なんでやねん、いきなり来て、いきなり死ぬんか！

そんなん勝手や……『タツ……！』

あたしの腕の中の、『タツが……だんだん冷とうなつていくん、
冷とうなつて欲しないから抱きしめて、体さすつても全然温うなら
へん。

さつあまでサラサラフワフワしつた毛皮もボロボロのナイロン
みたいな手触りになつてゐる。

「『タツ……『タツ……『タツ』』」

涙が『タツの顔に落ちて、まるで『タツも泣いてるみたいや。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2147v/>

究極生物コタツ

2012年1月10日23時47分発行